

令和6年度 第1回 地域連携コンソーシアム会議 議事録

時刻	次第・発言者	発言内容
	<p><開会行事> 進行(黒木総括) <開会挨拶> 矢野課長</p> <p><座長選出></p> <p><協議1> 社会教育課 首藤</p>	<p>開会の言葉</p> <p>本県では一昨年度より、文部科学省の委託事業を活用して「生涯を通じた障がい者の学び支援事業」を実施しております。</p> <p>これは、障がいがある方が学校を卒業した後に仲間と交流したり学んだりできる場づくりを推進するために様々な取組を行い、将来的には誰もが障がいの有無に関わらず、共に学べるインクルーシブな社会の実現を目指すものです。</p> <p>事業の基盤をなすのは本コンソーシアム会議です。社会教育、特別支援教育、障がい福祉分野の関係者のネットワークを構築することで、県の事業に対して御助言をいただいたり、様々な情報や課題を共有して新しい取組を生んだりしてきました。</p> <p>たとえば、大分大学の生涯学習講座や公民館講座の講師を県身体障がい者福祉センターあすびあ様に紹介いただいたこと、特別支援学校出前講座では、おおいた障がい者芸術文化支援センター様に取組をご紹介いただいたことなどがあります。</p> <p>また、昨年度実施した博愛病院でのコンソーシアム会議、今年度実施予定の障害平等研修は、本会議の意見を取り入れた取組になります。</p> <p>今年度は事業開始3年目となります。来年度以降の持続可能な取組みのあり方を探りながら、取組を全県的な普及を図るとともに、「学びの拠点」という新たな取組の展開も予定しております。</p> <p>本日の第1回目の会議においては、ねらいが2つございます。</p> <p>まず委員の皆様には本年度の事業展開案についてご意見やご助言をいただくこと、次にコンソーシアム委員の方々のそれぞれの取組や活動について情報共有し、本事業へのご協力のかたちや新たな連携の可能性を考えていただくことです。</p> <p>委員の皆様には、本事業の推進のため、忌憚のないご意見をいただきますようお願い申し上げます。開会の挨拶といたします。</p> <p>本日は、どうぞよろしくお祈りいたします。</p> <p>座長：岡田委員 副座長：矢野委員を選出</p> <p>事務局：令和5年度の事業報告</p> <p>令和6年度の事業計画案 (新規)・報告書を作成 (拡充)・実践研究：新規モデル公民館として、国東市、日田市、 図書館として杵築市立図書館を加え6館 青少年の家ワンデイキャンプ⇒由布市を対象に 特別支援学校出前講座</p>

	<p>(新規)・普及啓発：DET 研修 (障害平等研修) 7/19</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学びの拠点 (おおいたユニバーサルカレッジ) のコンセプト ⇒仕事帰り等にゆっくり話しながら学べる場 ⇒ヨカたのに委託、 <p>※来年度以降の計画については第2回コンソーシアムで協議予定</p>
<p>岡田座長</p>	<p>大分大学生涯学習講座</p> <p>1年目：大学で学ぶ体験をしてもらおうというコンセプト、図書館や学食体験、キャンパス内でバードウォッチング等</p> <p>2年目：大学が「つなぐ」ことを意識⇒あすびあに協力してもらいパラスポーツ等行った</p> <p>3年目：参加者の生活空間を広げるような取組をしたい</p> <p>全体講座と、個別のニーズに対応するような講座 (パソコン操作等) 委員の皆様にも御協力いただきたい。</p> <p>他に何か質問や意見があればお願いします。</p>
<p>馬場委員</p>	<p>杵築市立図書館はどのような取組をするのか。</p>
<p>事務局</p>	<p>バリアフリー図書関係の環境整備</p> <p>並行して、3回講座 絵手紙講座をひらき、参加者にバリアフリー図書の紹介をする。あとフェア、バリアフリー映画上映会を予定している。7月から開始</p>
<p>馬場委員</p>	<p>県立図書館でも同じような取組をしたいと考えている。</p> <p>公民館と共通でどのような取組ができるか考えた際、モデル的に障がいがある方を対象とした講座を実際にやってみることがひとつと、今ある施設をどう使いやすくしていくのが重要だと思っている。県立図書館は使いにくい部分があるので、杵築市立図書館と情報交換できればと思っている。</p> <p>日常的に出かけていく場所、ユニバーサルカレッジや図書館がそうなるの良いと考える。</p> <p>(休憩)</p>
<p><協議2> 高橋委員</p>	<p>県内の取組の現状と課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・どうやってつながりを作っていくかが難しい。当事者への届け方 自閉症・情緒障害学級が小中学校にある。卒業したら特別支援学校に行くことは法律的にはない。今は事業のお知らせが特別支援学校にはいつているが中学校の情緒学級にお知らせするのが長い目で見ると良いのでは。 ・放課後等デイサービスの利用者が増加。デイサービスの活動として土曜日の講座に来てもらう等して、放課後デイサービス事業者と連携しては ・動画教材についてゲームやゲーム動画の配信を見ている子が多い。ゲーム動画の配信の仕方等あったら、仲間と一緒に集まってわいわいできるのでは。 ・私もパネルシアターをしている。歌や言葉もあるので、図書館でするのであればパネルシアターを見るだけではなく自分で作って操作して、ということも

<p>清末委員</p>	<p>可能なので、今後できることがあれば協力したい。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別支援学校として何ができるかという、学校が主体性をもって子ども達の将来の余暇活動につながるような活動をどう設定していくか、普段の指導のなかでどう扱っていくかが大事。現在大分支援では出前講座という受け身的なかたちとするのではなく、学校の「生涯学習講座」というのを教育課程の中に取り入れられないかということ職員に指示している。学校の方から今後この事業を継続していただきたいのもあるし、学校としても生涯学習につながる取組を継続していきたいと考えているところである。
<p>友成委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・OUCのビラ、原則18歳以上なので卒業生へ、というお願いだが、卒業生に学校を通じてお願い、というのが個人情報関係で難しくなっている。3週間前だったらちょうど運動会のお知らせと一緒に配布できた。そういうところをどうしていくか考えていかなければならない。昨年度は卒業時に登録等をしていくと提案した。今年度登録すると数が増えるのは来年度になってしまうが、裾野を広げる取組は必要だと思う。 ・本校卒業生を対象とした青年学級を月に1回している。先日の1回目、子ども達は重度の子と20年前くらいの卒業生が中心で来ている。近年の卒業生は社会教育的な場があるが、なかなか昔の卒業生はそういう場がない。そういう子達の教育はどう考えていけばいいかと考えさせられた。
<p>宮脇委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・あすぴあ大分の施設、教室の説明 ・eスポーツやドローンサッカーにも令和3年度から取組を始めた。 ・いろいろなプログラムにチャレンジするきっかけや参加者同士がつながりあえるような一緒に時を過ごす空間作りを試行錯誤しながらつくっていているので委員の皆様には今後とも御協力をいただきたい。 <p><高窪委員></p> <ul style="list-style-type: none"> ・障がい者社会参加推進センターの取組の説明 ・相談の中で、地域で孤立している、行く場所がないという方が結構いらっしゃる。OUCを求めている方もいる。精神障がいの方は出て行くまでの支援、出て行ったあとに継続できるような支援も必要じゃないかと痛感している。交流できるような場が地域にどんどんできるといい。
<p>石川委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・自立支援協議会は、宇佐市にお住まいの障がい当事者とご家族の方々が地域で安心して生活できるよう現状の社会資源では問題の解決が困難なことについて、官民共同で協議して解決を図る。「地域の課題を解決するしくみ」である。余暇支援も課題である。成果として①「ピアサポート教室」⇒事業所の枠組みを超えて実施。10年を超えているのでスマホとかアクティビティを入れていきたい。②芸術文化の活動⇒年3回。③かけはし号⇒グループ型移動支援。秋のツアー等を企画。④フリースペースそよかぜ⇒当事者スタッフ2名障がいを隠さずにいつ来ていつ帰っても良い場所。イメージとしてはユニバーサルカレッジに近い。毎日実施。⑤ピアサポートフェスティバル⇒お祭り。

		<p>⑥ともに生きる宇佐市民集会</p> <p>課題としては、「教育と福祉との連携」を挙げている。</p> <p>コンソーシアムに参加することで、青少年の家ワンデイキャンプに関わり、進め方について協議等している。今年度3年目なのでしっかりふり返しをしたい</p> <p>また特別支援学校出前講座でも連携している。ただ、市の教育委員会との連携が非常に課題である。今年度協議をしたいというところになっている。</p> <p>色々なイベント等取組をやっているが、障がい者に特化した取組になっているので、そうではなく既存の公民館活動に障がいがある方が参加できるような仕組みづくりを目指していきたい。</p> <p>横山委員</p> <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度の取組紹介⇒相談件数450件：もっと多方面に広げていきたい。 ・相談内容：鑑賞は2件 鑑賞機会を提供できていないのではないかと。7/30のイベントチラシを盲人協会等に直接出向いて説明すると、今までオンテナがあることを知らなかったと言われた。よりどころとする協会さんに届けたつもりでいたが、あまり認識されていないことがわかった。 ・事業を行うにあたって、学校とのつながりを大切にしたい。特別支援の校長先生をはじめ、小中学校に情報提供するために、教育事務所を通じて市町村の教育委員会とつながって事業をすすめていきたい。とにかく出向いて少しでも正しく情報が届いていくようにしたい。 <p>吐合委員</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「元気の出るアート」に登録されている作家は24名（県内）。 ・展覧会やワークショップをしている。 ・今年度の由布市のイベントは、昨年度のコンファレンスでお会いした由布市教育委員会の人権関係、社会教育関係とのつながりから実現した。 ・サポートセンター風車（臼杵市）相談支援事業 チャレンジ教室20年ずっと続けている。100回／年している <p>課題としては、知的障がいや身体障がいの方は福祉が一生関わっているのだから福祉から情報が入る。ただ、発達障がいの方は支援学校に行かず、県立・私立学校に行っているが、卒業後福祉につながらない。相談先が分からない。診断名をもらった方がいいが、大人になってアスペルガーとかADHDが分かった方々のサードプレイスがないことをつくづく思っている。中学校の時に保護者の方にそういう情報（医療や福祉とつながった方がいいということ）を伝える</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いろんなHPを包括して「ここを見たら全部わかる」というのがない。あればよい。教育と医療と福祉（特に重度の方のサードステージ、余暇支援）を考えていかなければならない。移動手段等保護者の協力が大事 <p>瀬尾委員</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大分県障がい者計画第2期に基づいて、スポーツや芸術活動の振興を担当している。 ・県の長期総合計画策定中。これまでは障がい者雇用率日本一を掲げてきたが、今後は一般就労に加え、地域の中での生活、芸術文化・スポーツの振興等あらゆる場面で活躍する障がい者を応援したい「障がい者活躍日本一」と
--	--	--

		<p>いう目標を掲げて取組をすすめたい。委員の御協力をいただきたい</p> <p>伊達委員</p> <ul style="list-style-type: none"> ・大分県ソーシャルフットボール協会 ⇒精神疾患の治療目的でスタート。医療と福祉が連携。学校を卒業した後、孤独やP T S Dを抱える方が増えており、自分の存在意義や自己肯定感（の欠如）は医療や福祉では埋められない（限界がある）。こうした教育との連携によって、学びを深められるという利点がある。年に2回大分で大会をしている。チーム数も増加傾向。ソーシャルフットボールをすることで社会とのつながりの第一歩となる。 <p>西本委員</p> <ul style="list-style-type: none"> ・スペシャル・オリンピックス大分 大分大学で保健体育の教師を務める。 ・体育の授業では「上手い者」「強い者」が評価され「出来ない者」が疎外される、そういう授業をしてはならないと学生に教えてきた。 ・スペシャルオリンピックスはほとんど毎週どこかのスポーツに参加するというかたちで皆さん頑張っている。世界大会までである。広い視野の中でスポーツを実践しながら社会の中で存在価値をもって生活できるということを目指す。課題は参加者が少ないこと、年齢が上がってきていること。同じ人がずっとやっているので参加者や種目を増やすためのプログラムを考えていかなければならない。 <p>五反田委員</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自立支援センターおおいたは重度の身体障がい者を支援。日常生活でひとり暮らしをしてみたいという方が何から始めていいか、住宅や買い物等の支援が必要。学習の場として月に1回ボーリング交流会等を実施している。知らないことを知る機会、知るための情報発信していく必要があると感じている。 <p>佐藤委員</p> <ul style="list-style-type: none"> ・手をつなぐ育成会は、知的障がいがある方の保護者団体。何かを起こすという組織ではなく、情報発信を会員に対してする組織である。最近HPを立ち上げた。相談を受けることがあるが、「雑談」が大事であり、雑談の中で相談者が何か利益が得られるよう努めている。会員は1, 0 0 0名。 <p>神田委員</p> <p>大分県精神保健福祉会という、精神障がいの親の会。 地域の格差が大きいと感じている。県南で私が身近に感じる障がい者支援、余暇活動はあまりないようだ。実際にいろんなところでいろんな活動をしているが知らないことばかりだと思う。精神障がいの方々は、なかなか出て行けない、自分で一歩踏み出すことが苦手なので、支援する身の回りの方がちょっと後押しするといろいろ活動できたりする。 ときめき作品展に出品したりすることが必要だといつも感じている。 褒められたり賞をもらえたりすると変わる。精神障がいの方は自信が無いので、自信が回復できると生活がぐんと変わるのを見てきたので、芸術やスポーツ等、みなさんが自信を持てる機会があるとよい。家族の会の中に当事者の会があり、バレーとソフトをずっと続けてきたがそういう活動を支援すること、</p>
--	--	---

		<p>施設にときめき作品展等に参加するよう声かけすることをしている。 精神障がいの方々は障がいがあることをオープンにすることが難しい 施設の方々は支援者のあとおし（協力）がないと参加は難しい。 自立支援協議会が活動できている地域とできていない地域があるので、どうやってそろえていくのか、働きかけていき、どの地域でも同じ支援が受けられるようになっていくとよい</p> <p>佐藤祐委員</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ソニー太陽 200名のうち、6割が障がいがある方 ・インクルージョンワークショップ（物作り、プログラミング）を実施。障がいがあるスタッフが講師をすることで、物作りの楽しさを伝えるだけでなく、多様性の理解につなげていきたいというねらいがある。 ・対象は子ども達。全国を回っている。大分でもオーラボと協働で実施。フリースクール等でも。課題としては、障がいの有無に関わらず募集をしているが、障がいのある方の参加が少ない。もう少しアピールを工夫していきたい。一緒に学ぶことによって多様性の理解を幼い頃から身につけることは、社会全体のインクルージョンにつながると思うので引き続き活動していきたい。 <p>宗野委員 代理：岩橋主事</p> <ul style="list-style-type: none"> ・日田市社会教育課の事業「青少年リーダー研修」令和4年度において、青少年事業に参加している子どもを対象に、「障がい者のスポーツを知ろう」という、ボッチャ、フライングディスク、ドローンサッカー、卓球バレーを実施した。子ども達が楽しく取り組んでいるのがよかった。車椅子の方の手伝いを自然とできるようになった <p>佐藤高委員</p> <ul style="list-style-type: none"> ・宇佐市の課題としては社会教育課との協議の場ができていないのと、障がいに対する理解を一緒に分かち合いたいということ。講座をアップデートできていないので、今日色々な情報を聞いて、新たなアイデアを新鮮に聞くことができた。色々なつながりを大事にしていきたい。 <p>衛藤委員</p> <ul style="list-style-type: none"> ・特別支援学校ではこれまで「生涯教育」は「点」で、保護者が「こういったことをしたい」「できないか」と個別に教員に相談していた。これだけの方々が子ども達を育てていっているのだと強く感じた。ただ、プリントが学校にも配られ、子ども達が持って帰るが、それにどれだけ参加しているかが分からない。子ども達に週末の過ごし方を尋ねても、こういう会に参加するより、家でずっとゲームをしていた子が多い。 こういう会につながりやしくみをつくるのがとても大切だと感じた。そしてこの先、学校に返していけたらよいと感じている。 <p>馬場委員</p> <ul style="list-style-type: none"> ・県立図書館の取組について ⇒「読書バリアフリー法」は視覚障がいのある方にどう図書館を使いやすくしていくかというところ。 「障害者差別解消法」合理的配慮という面でこれまでの図書館がどう生まれ変わっていくべきかが問われている。
--	--	---

<p>矢野委員</p>	<p>県立図書館は、「市町村立図書館のための図書館」というのが本来の役割障がい者の方への取組についても、「図書館のあるべき姿」の先頭を走っていくのが使命である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・県立図書館のバリアフリーサービスの課題は、ハード面の整備（障がいがある方向けの蔵書、施設の使いづらさ）をどう解消していくか ・ソフト面：「指さしシート」ももとは外国人向けであるが、耳の遠い高齢者や知的障がいがある方にも使っていただけるのではないかと。カウンター業務を委託している民間団体に研修をしていく計画である。 <p>・事業3年目に入り、コンソーシアムで様々な情報をいただきながら社会教育として何が出来るかを考えながらやってきた。</p> <p>・おおいたユニバーサルカレッジの開講が明日。地域に気軽に集える拠点をどうやってつくっていくかが課題である。</p> <p>コンソーシアム会議の性格として事業推進のための意見をいただくとともに、委員のみなさんにつながっていただき、情報の交流や連携の話が出るなど何か生み出すことをしていけたらと考えていた。</p> <p>手弁当方式で自主学習会をさせてもらおうと、小グループでじっくり話すということもできたら良い。</p>
<p><協議3> 座長</p>	<p>協議(3)障がい福祉と社会教育の連携のあり方について</p> <p>教育の側からいうとなかなか福祉と組んだことがない</p> <p>福祉の方からいうと、どうも社会教育とつながれないというのがある</p> <p>まずは連携を試みている例を共有し、どうやって行くと良いか</p>
<p>事務局</p>	<p>教育と福祉ができてきた例</p> <ul style="list-style-type: none"> ・次第 P12 豊後大野市千歳公民館ひょうたんカレッジ コンソーシアムをきっかけに、あすぴあから講師（原野氏）を紹介してもらった。また、地元の障害福祉課や社会福祉協議会と運営委員会をたちあげているんな知恵をいただいて取組をはじめた ・次第 P14 の中津市は、「てくてく」という社会福祉協議会の余暇支援と連携 ・特別支援学校出前講座やワンデイキャンプで連携ができている部分があるが、こういう連携が良いのでは、とか連携に必要なことについて御指摘やご意見をいただきたい。 ・宇佐市でなかなか教育と連携できていない理由は何だと考えられるか？
<p>佐藤高委員</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・一度社会教育課に公民館活動で、うちの絵手紙教室などをしてもらえないかと相談したこともあるが、あまりピンときていないような、予算的なこともあるのかと思った。
<p>座長</p>	<p>社会教育はここ数年予算や職員が削減されてきている非常に厳しい状況があるだけに、今やっていることで精一杯というところがあるのかもしれない。</p> <p>ボトムアップと併せてシステムティックに上から情報を流してすすめていくこ</p>

		とも必要では
高橋委員		障がい福祉は使えるサービスの枠がきっちりしている。社会教育との垣根をどう越えるかという課題がある。宇佐市のフリースペースそよかぜさんは、地域活動支援センターですか？こういう場所がもっと増えるとそこに誰でも行ける、集えるというところが増えるのかもしれない。
石川委員		地域活動支援事業には必須事業と任意事業がある。必須事業の1つに「地域活動支援センターの機能強化事業がある。重層支援整備事業の地域づくりに流れていってるので障害者社会参加推進室にはあがってきてないことも。「Ⅰ型」「Ⅱ型」「Ⅲ型」いずれかをしておけば良いのがネック。「Ⅲ型」は小規模な作業所、Ⅱ型はもともと身体障害者のデイサービス、Ⅰ型というのは精神障害者の地域生活支援センターのデイサービス分、なので汎用性が高い。ただ、相談支援事業所と一緒にやっておくのがポイント。Ⅰ型をやっているところが各市町村でしっかり整備して行って。自立支援協議会などで、こういうフリースペースが当事者の余暇活動の拠点になるのだという機運をみんなで醸成していくというしくみにしなければいけないので、ひとくちに「地域活動支援センター」といっても全然違う。宇佐モデルを広げていくつもりではいるが、神田会長のところはそういうⅠ型ですか。
神田委員		話をきいてもっと頑張れるところがあるのかもしれないと思った。 精神（障がい）の関係はどこも地域活動支援事業で採算取れなかつたりB型に移行しているところがあったりしているので、ほとんど残っていない。 経営が厳しいという面もある中で役割を果たさないといけないかなと思う。 精神の関係の当事者さんたちが芸術や余暇活動ができるのは地域活動支援事業かなと思う。
高橋委員		さくらの杜を借りて明日開講ということだが、結局ハードからつくるのはお金がかかるので、今あるものをどう使うかと考えたとき、一番使い勝手が良いのは地域活動支援センターかなと思うが、県内の数は少ない。社会教育の方から障がい福祉の方にどんどんアピールして行って連携していく。社会教育ができるのは、そのなかの「学び」等ソフトの部分を提供できる。県の障害福祉課と話をしてはどうか。
石川委員		地域活動支援事業をどれだけ活用していくかについて、障害者社会参加推進室に（所管が）うつったが、どういうメニューをしているかという予算の中身の部分までは把握していない。障害福祉課の方も同様。 相談支援専門員の研修をする際、事業の活用について市町村の方々と協議して考えている。そういうしくみづくりを考えていかないと厳しいので、ぜひコンソーシアム会議の中で発信していただきたい。
吐合委員		大人になった障がい者の支援をするのが相談支援専門員。専門員が立てる計画

		<p>の中に、本人が何をしたいか、どんな余暇支援を希望しているのか、そういうのを書く欄がある。専門員が資格をとるために勉強するのが研修。その研修の場でこういう取組があるということをお話したら良いと思った。5年くらい前の研修で、3日間の日程の最後の最後に、おおいた芸術文化支援センターのコーナーを作って下さった。専門員の研修ではなくても施設長の集まりだったり、福祉で実際関わっている人たち、その人たちに指導する立場の人にぜひこの取組のことをお伝えできればと思う。そうしないとみんな「知らない」で終わってしまう。臼杵のサポートセンター風車の予算は市役所の障害福祉課からですが、「元気が出るアート！」で実施している「臼杵まちなかアート」の予算は教育委員会の文化財課。お互いがそれぞれ芸術的なことをしているのに行き来がない。臼杵も以前、教育と福祉が一緒になってフォーラムをやっていた時期があるが、最近是一緒にすることがなくなった。チラシをまく1つとっても、横串がおるととっても良いなと思います。</p>
座長		<p>相談支援専門員に情報が伝わるといろいろ広がるかもしれない 宇佐市でこれから（教育と福祉が）話をすすめていく際の苦労などをここで共有できると次の取組がしやすいのかもしれない。</p>
馬場委員		<p>昨年度は事務局の立場で市町村を回っていった際、共通して言えるのは、社会教育の側に「こういうことをやらんといかん」「ぜひやろうよ」と熱くなる人が必ずいたこと（由布市の神田係長や庄内公民館の衛藤前館長、中津の山本センター長など）自分から福祉の方に飛び込んでいってつないでいった。社会教育の側が福祉との連携をしないといけない。「障がい者の学びは福祉の話だからね」で済まらずに、「福祉は福祉、教育は教育で、障害者差別解消法があるのだからやらなければならないのだ」ということを自覚していくことを今後どれだけ周知していけるかが大事で、障がい者の学び支援に目を向ける人を増やしていく、または育てていくことが、両者が連携していくにあたって重要である。</p>
座長		<p>最終的には地域でしくみやシステムをつくっていくことが大事。 その過程で出会いとかとエピソードをつくっていかないとうまくいかない。 良い知恵を蓄積していければ</p>
吐合委員		<p>行政に熱心な方がいても、残念なことに3、4年で異動になってしまう。最終的には石川委員のところのような社会福祉法人の、ずっと変わらないところ「この人だ」という人を行政が見つけて働きかけをしてくださって、その後は、変わらない地元のところが継続していかないと良いのでは</p>
座長		<p>公民館も異動がある。異動しても取組を続けるという合意形成が必要 個人が動く部分と、組織が動く部分（継続性・発展性）が大事。 今回いただいた意見・ご提案を今年度の取組、または今後の取組をどうするかについて考えて、具体化につなげていきたい。</p>

	<p>閉会行事 課長</p> <p>事務連絡</p>	<p>長時間にわたり熱心な協議をいただきありがとうございました。 ヒントをいただいたので、今後ともどうぞよろしく申し上げます。</p> <p>以上をもちまして、第1回地域連携コンソーシアム会議を終了いたします。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・オピニオンシートのお願い ・第2回会議は10月下旬。その前に知恵を出し合う場も設けたい。
--	--------------------------------	--

<意見・提案のまとめ>

- ・中学校の情緒学級や放課後デイサービスと連携し、取組を周知すると良い。
- ・既存の公民館活動に障がいがある方が参加できるような仕組みづくりをする等、新たにハード面を整備するのではなく「今あるもの」を活用して、ソフト面を社会教育が提供する。
- ・盲人協会等、当事者の所属する団体に直接出向く等、積極的なアプローチが必要である。
- ・精神障がいの方々は、支援者の後押しが必要。作品展等の出品や講座への参加で自信が回復できると生活がぐんと変わるので、芸術やスポーツ等、自信を持てる機会があるとよい。
- ・社会教育の側から障害福祉課にアプローチし、連携する。
- ・相談支援専門員にこの取組を知ってもらう機会をつくるとよい（研修等）。
- ・社会教育の側で熱くなる人を発掘・育成して、取組をすすめ、その人が異動しても続けられる、組織として持続可能なしくみやシステムづくりをすすめるると良い。